宇和島城の戦闘能力

１年１組　井上佳太朗　　１年２組　久米　一道
１年３組　堀川　大輝　　１組３組　薬師寺祐介
指導者　教諭　井上　真介　　教諭　水谷真砂美
教諭　中川　彩矢

１　課題設定の理由

私たちが通っている宇和島東高校の近くには、現存12天守の一つ、宇和島城がある。昔から近くにありながら、私たちはあまり宇和島城について知らない。そこで宇和島城について調べながら、その中で特に戦についての能力、つまり「戦闘能力」について研究したいと考えた。そして、同時に、地域についての理解も深めていきたいと考えた。

２　調査方法

・実際に宇和島城に登り、天守閣までの道などを観察する。
・宇和島城について書かれている文献を集める。
・上記のことから考察し、「宇和島城の戦闘能力」を判断する。

３　宇和島城の観察

(1) 昔の地形

宇和島は日本でも屈指のリアス式海岸が連続する地形の中に位置している。地形は複雑に入り組み、平地部が少ない。現在は埋め立てが進み、宇和島城は市街地の中央に位置しているが、昔は図１のように、半分ほどが海に面していた。海に臨んでいることによって、海を通じた物資の運搬ができる。また、水軍などの兵の運用もできることだろう。

図１　桑折（こおり）氏武家長屋門前
案内板　撮影写真

(2) 宇和島城の形

宇和島城の城郭は特徴的で、一般の城とは違い、図１のように五角形をしている。また、天守閣の周りには、矢倉が多数ある。宇和島城を調査して気づいたこと、それは図２～４にもあるように、矢倉があった所からは天守閣の周りの階段や、施設などが見える。おそらく、矢倉から直接、登ってくる敵を射落せるようにしているのだろう。そうすることで攻撃開始までの時間を短縮することができ、敵に対する防衛の効率をあげることにつながっていると考えられる。

図２　階段横の石垣の上にある矢倉跡

図３　階段横の石垣の上からの写真

図４　階段から石垣を見上げた写真

４　考察

城が戦に使用されるのは、片方が籠城し、もう片方が攻める、攻城戦の時である。攻城戦での手法はいろいろあるが、そのなかで城が重要である「包囲」、「強攻」、「城の破壊」について考察したい。「包囲」は城を包み、相手への食糧の補給を阻止する、「兵糧攻め」などをおこなう。「強攻」は兵が城に直接攻め込み、城内に入りこむ。「城の破壊」は攻城兵器などを使って城門を破壊したりして、突破口をつくる。

これらに対して宇和島城は半分が海に面していて、五角形の城郭をしていた。城郭がなぜ五角形をしていたかというと、敵に錯覚させるためである。そして実際にこの構造は役に立ち、幕府の隠密も「四角形をしている」と報告したそうだ。そしてこれは戦でも役に立つ、敵はまず宇和島城を四角形だと思って攻めてくる。しかし実際は五角形であるので一辺に空きができる。そしてこの一辺は味方にとっての安全な場所になるとともに反撃するための糸口となる。その上、物資の搬入口にもなり、落城の際の脱出口となる。これは後に「空角（あきかく）の経始（なわ）」と呼ばれるようになった。空からの撮影が可能となった現代だからこそ把握できるが、当時は幻惑できたのであろう。これで「包囲」には対応できる。そして宇和島城を観察して発見した矢倉の配置、これは「強攻」に対策するためのものであろう。「城の破壊」について、宇和島城は藤堂高虎によってとても戦に適したように造られていたが、のちに伊達氏が藩主になると、改修の名目で現在の天守閣に建て替えられたそうだ。この天守閣には石落とし、矢狭間、鉄砲狭間がなく、戦に適していない。そのため昔の戦に適した宇和島城については、調査することが不可能であった。

５　まとめ

今回の調査で、宇和島城は、昔は戦闘に適した造りになっており、とても戦に役立つことがわかった。建て替えられる前については資料が現存しておらず、調査は困難を極めるだろうが、建て替えられる前の宇和島城について調べていきたい。これまで調査したことから、「宇和島城の戦闘能力」はとても高いということがわかる。ゆえに、宇和島城は攻められてもただで落ちたりはしないだろう。戦国時代は結局この城は戦に用いられることはなかったが、現在の姿には、その強さの片鱗を僅かながらに残していると言える。

６　参考文献

・土井中　照　　(2014) 11/11『愛媛の地理, 地名, 地図の謎』実業之日本社　54～57P
・中村　眞樹　　(1983)　3/24『愛媛の昭和史』毎日新聞社　226～237P
・高橋　洋次　　(1997)　6/20『広島, 松山, 山陽, 四国の城下町』平凡社　136～144P